

京都大学	博士（文学）	氏名	葛栩婷
論文題目	「愚管抄」の史論をめぐって		
（論文内容の要旨） 慈円が著した『愚管抄』は日本における重要な古典であり、学界ではそれに関する精緻かつ詳細な研究が積み重ねられてきた。先行研究では、慈円は自らの出自たる撰関家の立場から『愚管抄』を執筆したことが強調されてきた。かかる見方に異論はないが、慈円はより広い視野から日本の歴史を叙述し、自らの思想を後世に伝えようとしたとすることが本論文の主張点である。『愚管抄』の最大の特徴は、慈円が神武天皇から順徳天皇に至る八十四代の天皇の歴史を記述する際に、単に歴史的事実を述べるのではなく、事実に対して独自の解釈と説明を加えている点にある。したがって本論文では、全体を五章に分け、八十四代の天皇の歴史に対して慈円がどのように論じているのか、そして慈円の歴史解釈にはどのような特質が見られるのかを解明する。 第一章では三節に分けて、六国史から世継物語への日本における史論の変化、および日中両国の史論の差異について論じた。第一節と第二節では、中国古代史学の伝統を参照しながらも、日本の六国史では体系的な史論が展開されなかった要因について考察した。その結論として、中国の易姓革命思想とは対照的に、日本においては万世一系の天皇制が維持され、六国史編纂事業が王朝の正統性を証明する連続的営為として位置づけられていた点が指摘できる。このような歴史編纂の制度的・思想的背景があるため、編纂者による独自の史論を展開する余地も必要性もなかったのである。 第三節では、撰関政治から院政への移行という政治構造の変容が、世継物語の編纂者に新たな歴史認識の枠組みを提供する過程を検討した。具体的には『栄花物語』や『大鏡』が撰関家と天皇家の関係を描き得た背景には、撰関政治という新たな権力構造の登場があった。同様に、『今鏡』が院政を論じたのも、この政治体制が従来の朝廷秩序を相対化したためである。こうした政治構造の変容は天皇権威の絶対性を相対化し、結果として歴史叙述者に多様な史論展開を可能にする認識論的転回をもたらしたのである。そして慈円が『愚管抄』を著した時代には、日本社会は治承・寿永の乱を経て、鎌倉幕府の成立という新たな課題に直面していた。これが『愚管抄』において武士に関する史論が多く見られる理由である。 総じていうと、第一章では、『愚管抄』を日本史学史の文脈に位置づけ、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』などの世継物語が提起した歴史認識との連続性について考察した。結果、明らかになったのは、『愚管抄』が世継物語の歴史的問題意識を継承しつつも、独自の解釈の枠組みを構築していたということである。具体的には、両者の歴史解釈には相違が見られるものの、撰関政治や院政のあり方をめぐる問題意			

識には共通性が認められる。このような問題意識の継承から浮かび上がるのは、易姓革命を繰り返した中国の歴史記述とは異なる、日本史学固有の特質なのである。

第二章では、王位継承論、幼帝論、血統論の三つの側面から『愚管抄』における天皇論を分析した。第一節では、慈円は、王族間の王位に対する争いが政体の不安定や社会の混乱を惹起するものと考えており、兄弟間の争いが保元の乱の直接的な原因であると認識していたことを明らかにした。第二節では、慈円が幼帝の合理性を強調したのは、単に摂関政治の正当化を図るためではなく、より深い次元で王朝秩序の安定性を理論化しようとしたためであることを示した。崇峻天皇の殺害事件より、慈円は幼帝の出現を、天照大神が日本の天皇を守るための措置であると考えている。それは慈円が中国の易姓革命を深く理解した上での結果だと考える。中国の歴史において、多くの皇帝は実権を握っていたが、王朝の末期には易姓革命を免れない。それに対して、日本の天皇は実権を握らないことにより、天皇という地位が守られることとなった。第三節では、『愚管抄』における血統論を踏まえて、「帝王系図」を理解すべきであると論じる。慈円の血統論は、日本の天皇の血統が神代以来一度も途絶えることなく継承されてきたとする理解に基づいている。これまで学界では、『神皇正統記』の著者である北畠親房の正統観を用いて、『愚管抄』の「帝王系図」を理解するのが一般的であった。しかし、『愚管抄』の本文からは、慈円が正統観を積極的に主張していることを示す確たる証拠は見いだせない。したがって、「漢家年代」の直後に置かれた「帝王系図」は、慈円にとって、日本と中国の政治制度の相違を明示するための資料だったと解釈する。すなわち、中国においては易姓革命によって王朝の交替が頻繁に起こるのに対し、日本では神武天皇より堀河天皇まで血統が一貫して継承されていることを示すために「帝王系図」が作成されたのである。

総じて言うと、『愚管抄』における天皇論は日本中世の王権論である。慈円は神武天皇に始まる日本の通史を体系的に記述し、その中で王権の性質が変わってきたことを見出した。具体的には、時代の推移に伴い天皇が実権を失う一方で、摂関・上皇・武士が順次政治的主導権を掌握していく過程を描き出している。ただし重要なことは、これらの勢力が天皇を補佐する存在として共存していたという点である。換言すれば、日本中世の王権は、天皇を中心としつつも、摂関・上皇・武士という諸勢力が複合的に関わる統治システムとして理解できるのである。さらに慈円は、天皇が実権を失った背景には、皇祖神による天皇護持の意志が働いていたという独自の解釈を提示している。このような王権論には確かに神秘主義的要素が認められるものの、慈円が天皇・摂関・上皇・武士に対して示した認識と評価からは、彼の日本歴史に対する深い理解が窺えるのである。

第三章の分析を通して、『愚管抄』の百王論は終末思想ではないことを示した。そして、一蔀思想の循環原理を明らかにした上で、一蔀思想は『愚管抄』の百王論を支

える最も重要な論理であると主張した。『愚管抄』における百帖の紙の比喻は早くから研究者たちに注目され、『愚管抄』の百王論は終末思想ではない根拠とされてきた。しかし、これだけでは百王論の議論が表面的なものにとどまり、石田一良氏の「百王思想＝終末思想」という見方を根本的に覆すことができない。例えば、黒田俊雄氏は『愚管抄』の百王論は終末思想ではないと論じているが、慈円の未来に対する展望については、「末法の極みの、すべての道理が尽き果てたかにみえるなかになお一抹の光明が残存することを、靈感に憑かれた情熱をもって説き続けるのである」と言っている。しかし、第三章では、慈円が未来に抱く希望は、熱情ではなく「道理」、つまり干支循環の理によって支えられていることを明らかにした。慈円は『愚管抄』で四つの「世の継ぎ目」に言及している。一つ目は応神天皇の時代であり、それからは仏法が王法を守る世になった。二つ目は一条院の時代であり、道長により摂関政治が全盛を迎えた。三つ目は白河院政期であり、院政という政治形態が始まる。四つ目は慈円が生きた時代で、慈円の構想通りに、二十年後に摂関家出身の摂家将軍頼経が摂関家を外戚とする仲恭天皇を補佐することができれば、小さな回復が実現するのではなく、全く新しい世界が始まると考えていた。

慈円の時間論は複雑である。全体的に見ると、慈円は歴史が下降していると述べており、これはいわゆる下降史観である。しかし一方で、慈円は百帖の紙の比喻を用い、紙が尽きる前に新たに補充すれば、再び百帖に戻ることができるという説いている。これは、深刻な衰退ののちに、歴史が大きく回復する可能性があることを示唆している。

第四章では、慈円の和語論はナショナリズムの顕現ではないことを示した。『愚管抄』の和語論は主に二つの点を強調している。第一に、『愚管抄』が執筆された当時、日本社会において真に漢文を読解できる者が極めて少なくなっていたこと、それに対し新興の武士階級における仮名書き物への需要が高まっていたことである。しかしながら、貴族の間では依然として漢文を尊ぶ意識が強く残っていた。第二に、慈円は和語こそが日本の言語であり、仮名は和語の本体であると主張し、人々が仮名を使うことを恥じるべきではないと説いた点である。当時の社会的背景を考慮すると、慈円の主張は確かに貴族社会の因習的な問題点を指摘したものであり、社会発展の潮流に合致していたと評価できる。これらの視角から『愚管抄』の和語論を考察すると、慈円の和語論が「ナショナリズム」の現れであるとはいいいがたい。

第五章の分析の結果、慈円の武士論は武士の成長に対する明確な認識の上に構築されており、それは中世王権が複数の人格によって相互補完的に構成されるという核心的特質を反映したものだといえる。慈円は、武士の台頭が既に天皇の擁立にも影響を及ぼしていることを明確に認識し、朝廷と武士とは武力ではなく平和的に話し合うことが最善だと判断している。彼の構想において、武士は摂関や院と同様、天皇を補佐す

る臣下として位置づけられる。ただし、武士に固有の役割は、その武力をもって天皇を守護する点にあり、これが他の権力主体とは異なる武家の特徴を表している。

本論文五章にわたる分析を通じて明らかとなった『愚管抄』における史論の特質は、次の二点に集約できる。

第一に、『愚管抄』の史論は梵（インド）・漢（中国）・和（日本）三国の知識を用いて展開している。最も典型的なのは第三章で論じた『愚管抄』の百王論である。『愚管抄』における百王論は梵・漢・和三国の時間論を反映している。四劫観はインド仏教の時間論で、一蔀思想は中国古代の時間論で、百王思想は日本の時間論である。仏教者である慈円が歴史の下降を唱えつつも、日本の天皇が皇祖神により守られていると強調する。終末を迎えるかに見えた百王の運命は、一蔀思想の導入によって転換され、百王永続の可能性が開かれた。この思想的転回こそ、『愚管抄』の史論が持つ複雑さと深みを象徴的に示している。多様な解釈を許容するその思想的柔軟性が、この書物の真の面白さなのである。

第二に、『愚管抄』の史論は、慈円の多面的な立場を反映している。彼は摂関家（九条家）の出身でありながら、出家した僧侶でもある。後鳥羽天皇の護持僧として貴族社会と深く関わり、宗教的権威と政治的影響力を併せ持っていた。さらに、仏教思想を深く学びつつ、漢学にも精通し、和歌の名手でもあった。このように、慈円は日本の貴族社会・仏教界・漢学・和歌の世界を有機的に融合させた希有な存在であり、それゆえに他に類を見ない多元的な視座から歴史を洞察することができたのである。この点を最も顕著に示すのが、第二章第二節で分析した『愚管抄』の院政論である。慈円は院政を、摂関政治に次いで日本に適応した政治形態として位置づけており、その出現を藤原頼通の「私心」の存在に起因させている。具体的には、後三条天皇が頼通の「私アリ」を看破した結果として院政が開始されたという解釈を示している。この院政論から明らかなように、慈円の史論は必ずしも摂関家の立場に限定されない多面的な性格を有している。さらに第二章第一節で検討したように、この多面性は承和の変に対する慈円の評価にも表れている。すなわち、承和の変を考察するさい、慈円は摂関家の権力掌握ということよりも、むしろ王位継承をめぐる争いそのものに焦点をすえている。このような分析視角が、慈円の歴史認識の多層性を如実に物語っているのである。

歴史家たちが歴史を記述する際、確かに政治的要因の影響を受ける。司馬遷が李陵を弁護したために宮刑に処せられなければ、『史記』という紀伝体通史の大作を完成させることはなかったかもしれない。同様に、慈円が治承・寿永の乱を経験せず、鎌倉幕府の成立や九条家の栄枯盛衰、九条頼経の第四代将軍への指名にたちあえなかったら、日本史上最初の史論体著作である『愚管抄』を執筆することもなかったかもしれない。しかし、これらの政治的要因をもって『愚管抄』の史学的・文化的な価値を

看過することはできない。本論文は政治史的なアプローチに加えて、文化的・思想的な文脈からの分析を試みたものである。かかる視角からみると、慈円が『愚管抄』を執筆した動機は、自らの思想を体系的に表明し、後世に伝えようとする意図に求められよう。総じて言うと、本論において一貫して主張してきたのは、『愚管抄』を日本史学史と文化史の連続性の中に位置づけてこそ、その真価が理解できるという点である。『愚管抄』を孤立的に分析する限り、そこに浮かび上がるのは後鳥羽上皇への政治的諫言に終始する慈円像に留まろう。しかし、日本史学の発展系譜と文化的伝統という広範なコンテクストで読み解く時、初めて明らかになるのは、真の意味での文化史家としての慈円の全体像なのである。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は13世紀初頭に慈円が著した『愚管抄』の史学史・文化史上の意義を論じるものである。慈円は鎌倉初期に摂政・関白をつとめた藤原（九条）兼実の同母弟に当たる。『愚管抄』は鎌倉幕府との対立を深める後鳥羽上皇を諫める目的で執筆されたとの見方もあり、先行学説では『愚管抄』は摂関家（九条家）の立場より執筆された歴史書とされてきた。著者はかかる見方を認めつつも、『愚管抄』は摂関家という立場にはとどまらないより広範な視野から日本の歴史を叙述したものであることを強調する。『愚管抄』に記された具体的な内容から、慈円が目指した「史論」を解明することが本論文の目的である。なお、著者のいう「史論」とは、歴史的事実に対して解釈を加え、歴史の推移・転換に関する法則性などを見出そうとする歴史叙述を指す。

本論は5章からなり、巻頭には研究史整理と課題を記した序章を、巻末には本論文の成果を踏まえ今後の課題と展望を示す終章を配する。以下、章ごとに主張点とその研究史上の意義を簡潔に述べる。

第1章では、六国史と『栄花物語』『大鏡』などの歴史物語における歴史認識を確認した上で、『愚管抄』との比較を行う。六国史にはほとんど「史論」がなく、それは日本では易姓革命がなかったからだという。平安中期以降に成立する歴史物語では独自の歴史解釈の枠組が生まれ、これが『愚管抄』へと継承されていく。それは、摂関政治・院政の展開によって天皇の権威が唯一・絶対的なものではなくなったことが原因だとする。歴史物語と『愚管抄』との関係は明確になったが、六国史に「史論」がないとする評価にはやや慎重さが欠ける。

第2章は『愚管抄』における天皇認識を王位継承・幼帝・血統の3つの視角から検討する。慈円は歴代天皇の継承を兄弟相承と父子相承に分けて考察し、兄弟相承が争乱を引き起こす原因のひとつになったと考える。そこには保元の乱後の貴族社会を生きた慈円の体験が反映しているとする。かかる認識のもと、慈円は独自の「帝王系図」を作成した。『愚管抄』に収録されたこの系図には、天皇となっていない者7名が記載され、40人の天皇が除外されている。系図にみえる神武から堀河まですべてが父子関係であり、父子相承こそがあるべき王位継承であるという慈円の認識が投影されていると述べる。『愚管抄』所収「帝王系図」は『神皇正統記』へと継承されており、先行研究においても議論がなされてきたが、系図の意義を正しく位置づけた点が本論文の白眉といえる。

『愚管抄』における百王論を考察するのが第3章である。天皇が百代に近づく平安末期には、末法思想の広がりや武士の台頭と相まって、「天皇は百代」という百王思想が流布する。百王思想は通常、百代までという終末論であると解されることが多いが、当時から百は無限を意味するとの理解も存在した。本章では慈円の百王論は後者にあたり、それを支えた論理が仏教の四劫説と中国の一蓊思想だという。特に慈円は一蓊に独自の解釈を加え、一蓊を60年と理解し、干支循環の論理を取り入れたと主張する。『愚管抄』の百王論を干支循環の論理で説明することにはなお検討が必要だ

が、「下降から上昇へ」という転換が存在することに着目し、それこそが慈円の思想の核心だとした点は評価できる。

第4章は慈円の和語論と中国史理解について考察する。当時、日本の知識人は世界がインド・中国・日本の三国によりできていると考えていた。先行学説では、慈円は和歌が陀羅尼（梵語）と団体だとする和歌陀羅尼説を唱え、それは日本とインドとの一体性を強調することにより、中国に対する劣等意識を相対化するものと考えられてきた。本章ではかかる見方を否定して、『愚管抄』の和語論にはナショナリズムはみられないと述べる。また、『愚管抄』所収の「漢家年代」の記載を分析して、当時の中国における一般的な歴史認識との差異を指摘する。和歌と『愚管抄』における漢字片仮名交じり文を「和語」で総称することは問題で、慈円の仮名・和語理解に関してはより深める必要がある。

第5章では、承久の乱後に成立した『六代勝事記』と比較することで、『愚管抄』の武士論の特色を明示することを目的とする。『愚管抄』では、武士（鎌倉幕府）は武力により天皇を守護し、摂関や院権力と同様、天皇を補弼する存在と位置づけていたとする。このような評価は、黒田俊雄氏が提唱した権門体制論が『愚管抄』における理解を継承しているという従来の見方を追認するものといえる。

以上、本論文は『愚管抄』における歴史叙述の分析を通して、その意義を論じるものである。本論文の核たる主張点は、『愚管抄』が摂関家の立場のみならず、より広い視野から日本の歴史を叙述した歴史書だとする点にある。ただ、総じて先行研究への批判が急で、事実に基づく論証が十分に伴っていない部分がみられる。

かかる問題はあるものの、『愚管抄』所収の「漢家年代」「帝王系図」の考察など本論文には新たな指摘が散見し、評価できる。また、一蔀思想の解釈には研究史を前進させる点がある。このような着実な実証や解釈をより精緻に行う作業が『愚管抄』の「史論」を分析する本論文には望まれるところである。この点は著者も深く理解しており、今後の研鑽により達成されていくものと確信する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2025年6月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。